

釧路短期大学 幼児教育学科

実践報告

第5号

2023（令和5）年3月29日発行

目次

<授業実践>

乳幼児期に必要とする専門職の関わりと今後の課題

—アタッチメント理論に基づくおんぶ・抱っこによる生育の有効性に関する考察—

橘澄子・小林麻如... 1

小学校における「学校だより」による発信

—児童理解と子育てのヒント—

秦直人... 12

小学校における「地域の自然や環境から体験的に学ぶ学習」

—教職の原体験をもとにしたコロナ禍における体験活動の必要性—

秦直人... 18

<事業報告>

釧路市輝くまちづくり交付金採択事業

「幼い子どもたちのためのコンサートひろば」の実践

—「0歳からのファミリーコンサート」の試み～豊かな感性の育ちを求めて その後—

進藤信子...28

2022年度 幼児教育学科の活動より

井上薫...36

乳幼児期に必要とする専門職の関わりと今後の課題

アタッチメント理論に基づくおんぶ・抱っこによる生育の有効性に関する考察

橘 澄子

(釧路短期大学研究生)

小林 麻如

(釧路短期大学幼児教育学科)

1. はじめに

私が 60 歳で保育の現場に出て初めに抱いた疑問は、「抱っこは子どもの自立を遅らせる」という保育士の言葉である。以前、私の転勤に伴い娘が当時通っていた保育所を退園する時、その保育所の保育士が「もっと抱っこしてあげれば良かった」と言われた言葉にとっても感謝して感謝した経験があった。にもかかわらず本当に「抱っこ」は子どもの自立を遅らせるのか、「抱っこ」はどのように子どもの生育に関わっているのだろうか調べてみたいと思った。

理論的には、アタッチメント理論という考え方が存在する。アタッチメント理論は、ハリー・ハーロウのアカゲザルの代理母実験やジョン・ボウルビイの Attachment theory (愛着理論) は、多くの研究者達が、今なお考察を重ねている〈古くて新しい〉奥の深いテーマである。明和政子¹⁾ (2019 年) の『ヒトの発達の謎を解く』を読んで、「ヒトの心と脳は他者の身体とアタッチメントすることで発達してきた。」という明和の言葉に、「抱っこ」と子どもの成育との関わりや「抱っこ」の大切さを知ることができると考えた。そして、アタッチメント理論についての認識を深めることで、私自身が「抱っこは、自立の促進に繋がる」というポリシーを持って保育所勤務に携われるようにと考えた。

また、2009 年 7 月に文部科学省が開催した〈子どもの徳育に関する懇談会〉で「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」として「子どもの発達段階に応じた支援の必要性」²⁾ について審議されている。この中で、「乳幼児期は、母親や父親など特定の大人との間に、愛着関係を形成する時期である。」とし、乳幼児期における子どもの発達において重視すべき課題の 1 点目に「愛着の形成 (人に対する基本的信頼感の獲得)」が掲げられている。

そこで、本研究では、乳幼児期における愛着形成に必要不可欠である養育者と子どものスキップの再確認をし、子どもを育てる保護者のみならず保育園などの集団生活の場での必要性について提言することを目的とする。

具体的には、以下の研究課題と研究方法を採用する。研究課題は、「乳幼児期に必要とする専門職の関わりと今後の課題ーアタッチメント理論に基づくおんぶ・抱っこによる生育の有効性に関する考察ー」。研究方法は、釧路市内にある私立保育園 4 園の 0 歳児クラスから 3 歳児クラスに通わせている保護者 159 名を対象とした質問票調査である。

本論文は上記の研究課題を解決するために以下の構成で議論を進める。まず、第 2 節では、アタッチメント理論についての先行研究を調べて重要性について整理する。第 3 節では、本論文で行う調査の方法を記述する。第 4 節では、調査の結果を整理する。最後に第 5 節では、まとめとして「抱っこ」「おんぶ」の有効性を明確にして保育現場に対する提言を行う。

2. 文献レビュー

2.1 Attachment Theory (愛着理論)

小野寺³⁾ (2009 年) は「1969 年イギリス人小児科医のボウルビィ Bowlby が提唱した理論が今日の愛着理論の基礎となっている。彼は愛着 (アタッチメント) とは, 「人が生まれてから数か月の間に子どもと継続的な特定の人 (母親や父親) との間に築かれる愛情関係もしくは情緒的な心の絆と定義した。」と述べ, 藤永⁴⁾ (2013 年) の解説では, より限定的に「危機的な状況に際して恐れや不安などの負の情動を経験した時に, 特定対象との近接を求め, またこれを維持しようとする生物個体の傾性」と捉え, 「こうした近接関係の確立・維持を通して, 自らが安全であるという感覚 felt security を絶えず確保しようとする生物個体としてのヒトの本性」「生物が進化的に獲得してきた生存戦略の一つ」と説明している。さらに『最新 心理学辞典』では, アタッチメントとは「心理行動的な安全制御システム」というべきもので「他個体との近接関係の確立・維持・回復をホメオスタティック (恒常的) にコントロールしている。」としています。その後, ボウルビィは, アタッチメントを「特定の対象との情緒的な結び付きを指し, 乳幼児が母親との情緒的な相互作用を通して形成される母親との確固たる絆である」と説明した。その一方でボウルビィは「乳幼児期に養育者との温かい関係を享受できなかった, いわゆる母性的養育の剥奪にさらされた子どもに, さまざまな心身発達の遅滞や歪曲が多く認められた。」とも記している。このことは [5, 愛着障害] で見ていきたい。

また, ハーロウ Harlow について山内⁵⁾ (2005 年) では, 「針金製だが乳をくれる代理母模型と布製だが乳をくれない代理母模型それぞれで, 生まれたばかりのサルを飼育した。その結果, 乳を飲むとき以外は仔ザルは布製の母親で過ごした。つまり食事を与えてくれる生理的欲求よりも, 触れていて安らぐという心理的欲求の満足が重要であることを示した」とある。

メアリー・エインズワース Ainsworth が考案したストレンジ・シチュエーション法 (strange situation procedure) という愛着の質を明らかにする方法がある。小野寺⁶⁾ (2009 年) によると「エインズワースは, 実験室で乳幼児 (満 1 歳児を対象) に見知らぬ人に対面させたり養育者と分離させたりすることによってマイルドなストレス (潜在的にアタッチメントを活性化させる状態) を与え, 乳幼児の行動を組織的に観察するストレンジ・シチュエーション法 (SSP) を開発した。そして, 乳幼児が養育者との分離時及び再会時に現れる反応の個人差を, A (回避型), B (安定型), C (アンビバレント型) の 3 タイプに分類した。現在は, メイン Main によって D (無秩序・無方向型) が加えられ 4 タイプでアタッチメントを分類している。エインズワースによれば, このような個人差は, 子ども達が置かれた養育環境により分かれてくる」としている。

これらの研究から, 乳幼児期の子どもにとって, 養育者の関わりが子どもの情緒面に影響を与えるということが言える。

2.2 アタッチメントと抱っこ

「アタッチメント (愛着)」と呼ばれる広く知られた考え方は, 子育てや保育現場で保育者

と子どもとの間に形成される特別な絆や愛情関係を表す言葉として理解されていることが多くみられる。しかし、ボウルビィは「生物個体としてのヒトの本姓」、ヒトを含む動物の子どもが危機的状況に立たされた時、養育してくれる他個体としっかりとくっつく（アタッチする）行動特性によって自らの生存可能性を高めるという生き残り戦略を生来的に持つと説明している。そして、明和⁷⁾（2019年）は「精神的にはアロスタシス（外部ストレスに対して危機を回避し危機が去ったのち安定状態に復帰させるシステム）をうまく使えない乳児に大きな危険や変化が起こった時、養育者にしっかりとくっ付き保護されることでアロスタシス効果を得るという機能を持つものである。そして、ヒトの乳幼児は泣いたり後追いしたりして保育者の関心を自分に引き付ける。養育者は、乳児からのシグナルを受け止め応答することの日常的な繰り返しによってアタッチメントは安定したものになり、その経験が子どもの生涯を通じて重要な意味を持つ。」それは「いざとなれば何時でもくっつける特定の存在が傍にいる。という安心感・安定感がイメージとして強く記憶の中に刻み込まれていることを意味する。「いつでもくっつける」そうした経験を豊かに持つことによって、成長してからも物理的に誰かに依存しなくても自立して行動できるようになる。」と述べている。

アタッチメントの基本は、特定の養育者と身体をくっつけることである。明和⁸⁾（2019年）は、この身体接触を大きく3つに分けた。「①刺激的接触（つつく、揺する、たかいたかい、ベビーマッサージなど乳児の姿勢を変えたり手足を伸ばしたりする）、②道具的接触（乳児の口を拭く、玩具を持たせるなど）、③情愛的接触（抱っこやおんぶ、撫でたり抱擁、キスなど身体が持続的に接触している（ただ単にくっついている状態）の3つのタイプがある。特に③「情愛的接触」は、認知発達を促進する接触に当たる。つまり、「情愛的接触」が乳児の主体的な探索行動を促進する」と述べている。

2.3 愛着障害

愛着障害とは、乳児・幼児期に不適切な養育環境マターナル・デブリーション（母性剥奪）でアタッチメント形成がうまくいかない状況で子どもの情緒や対人関係、心身の発達に遅れや問題が生じる状態を指す。愛着障害は心理的な影響だけでなく、病気に対する抵抗力や免疫力の低下も指摘されている。さらに、思春期以降には、うつ病・心身症・不安障害・多動性障害・解離性障害・境界性パーソナリティ障害などが引き起こすこともある。ヘネシー⁹⁾（2004年）は具体的な原因としては、①養育者との死別・離別、離婚などで愛着の対象者が不在の場合、②養育者から虐待やネグレクトを受けるなど、不適切な養育環境、③不特定の養育者が複数いて頻繁に交代したりするなどの不注意な養育、④その他、母親がうつ状態などが挙げられる。

愛着障害は、医学的には「反応性アタッチメント障がい（反応性愛着障がい）」と呼ばれ米澤¹⁰⁾（2018年）や岡田¹¹⁾（2011年）によると「抑制型愛着障害（抑制タイプ）」と「脱抑制型愛着障害（脱抑制タイプ）」に分かれ、どちらも5歳以前に発症する。2つの愛着障害の特徴は表1の通りである。

表 1 抑制型愛着障害と脱抑制型愛着障害

抑制型愛着障害	人間不信で警戒心や恐怖心が強く身体接触はしない。人を避け前や後ろから近寄られることを嫌がる。 イライラしていることや怯えることが多い 「嫌われたらどうしよう」と、いつもビクビクしている。もしくは攻撃的になる 自傷行為がみられる 自己評価が低く「どうせ自分はできない」といってチャレンジしない 嘘をつく 謝れない
脱抑制型愛着障害	知らない大人に対して、何のためらいもなく近づく、しがみつくなど馴れ馴れしく過度の身体接触をする。知らない人に対する態度を調節できない 注意を引くために大げさな態度をとる 落ち着きがなく乱暴な行為もしばしばとる 強情で意地っ張り 謝れない

「抑制型愛着障害」と「脱抑制型愛着障害」のどちらの愛着障害にも見られる態度の特徴として、[度が過ぎる我儘・強情]などが挙げられ、人への接触に対照的な特徴が見られる。

山口¹²⁾ (2006 年) は、「身体的虐待を受けた子どもについて、情動のコントロールが難しくすぐにキレやすく他人と肌を触れ合うことを拒絶する傾向があり、ネグレクトされた子どもは、スキンシップの心地よさを知らないため対人感情が育たず、他人と親密な関係を築くことができなくなる。また満たされない依存心を埋め合わせるように、逆にやたらと大人にべたべたと触れてくると説明している。そして、身体的虐待を受けた子どもに対しては根気よく温かな触れ合いをすることで人との信頼関係を回復させることが可能だが、ネグレクトされた子どもは、対人感情をゼロから育てることから始めなければならないため、すでに「ある」ものの性質を修正することよりも、何も「ない」ところから何かを育てることの方が難しい」と説明している。そして、このことから「幼少期の温かいスキンシップが重要である」と述べている。

また、山口¹³⁾ (2006 年) は「親からほとんど抱かれたり、あやして貰ったことのない子どもは、自傷行為に走る可能性が高まることが指摘されている。アメリカの心理学者プレスコット・レッキーは体への接触や触れ合いの不足は、抑うつ、自閉的行動、多動、暴力、攻撃、性的逸脱などの情緒障害の原因になる」と述べている。「幼少期に皮膚感覚への適切な刺激が不足すると大人になってから無意識のうちに歪んだ形で皮膚感覚を刺激するリストカットなどの極端な手段で皮膚感覚を呼び覚まし欲求不満を解消しようとする可能性がある」と推察している。

愛着障害を発症させた思春期の子ども達の対応の難しさを考えると、乳幼児期に構築すべきアタッチメントの重要性が理解できる。保育所保育においてもヒトの子育てが「抱っこ」や「おんぶ」など皮膚接触（スキンシップ）が基本にある事の意味をもう一度見直してみる必要があると考える。保育園に子どもを預ける保護者がスキンシップについて、どのように捉えているのか現状を把握するためにアンケートを行うことにした。

3. 研究方法

釧路市内にある私立保育園 4 園の 0 歳児クラスから 3 歳児クラスに通わせている保護者 159 名を対象に保護者が日常生活の中で行っている子どもとのスキンシップ方法やその義などについてアンケートを行った。回答方法は、選択式と記述式とし、スキンシップの方法や意義については記述式とした。なお、きょうだいがいる場合は、それぞれのクラスでアンケー

トに回答してもらった。

アンケート実施期間は、2022年2月2日から2月12日までの期間とした。回答は、112名からあり70.4%の回収率であった。

倫理的配慮については、アンケート内容を園や個人が特定できない設定にし、アンケート結果は統計的な処理を行った。

4. 結果

(1) 保護者が普段お子さんへ心がけているスキンシップの取り方

保護者が普段お子さんへ心がけているスキンシップの取り方については、アンケートで自由記述された単語を「情愛的接触」「刺激的接触」「道具的接触」「その他」のカテゴリーにそれぞれ分類し、グラフにした。なお、この質問での分類については、「情愛的接触」は、抱っこ、おんぶ、手をつなぐ、膝やお腹の上にのせるとした。「刺激的接触」は、マッサージ、たかいたかい、触れ合いあそび、手足を持ってあそぶとした。「道具的接触」は、玩具で遊ぶ、絵本を読む、絵を描く、おままごととした。「その他」は、ほめる、一緒に買い物に行く、一緒にご飯を食べるなどとした。

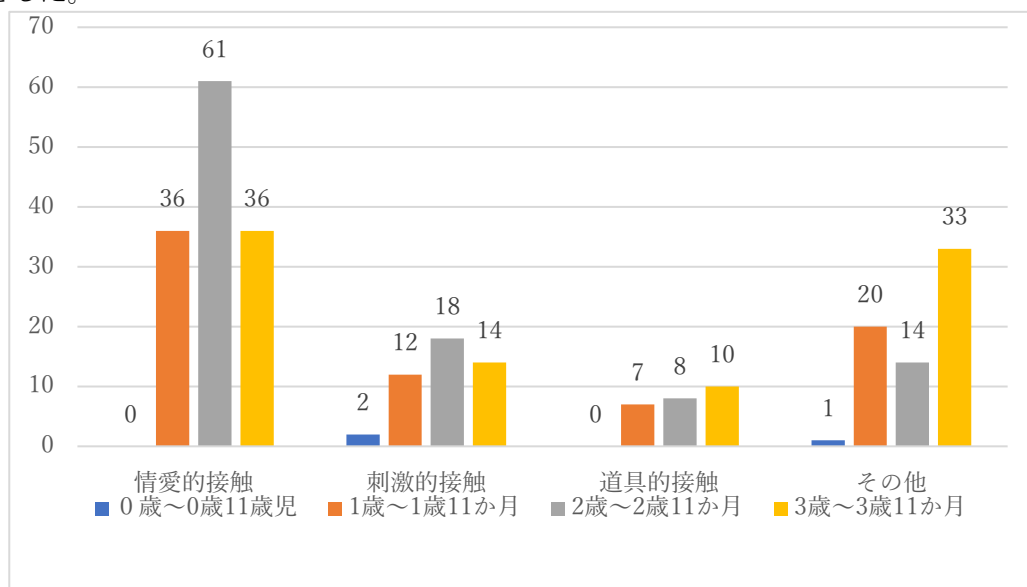


図1 保護者が普段心がけているスキンシップの取り方

この結果から、0歳から3歳11か月を通して保護者は、主に情愛的接触を取り入れていることが分かる。また、3歳から3歳11か月では、保護者が子どもとの接触方法として行う情愛的接触の次にその他となっている。このことから保護者は、年齢が上がるにつれて身体的な接触から言葉を使用した接触方法へと変化していくことが考えられる。

(2) 保護者が、日常生活の中で「抱っこ」または「おんぶ」を行うか

保護者が、日常生活のどのような場面で「抱っこ」または「おんぶ」を行うかについての質問について、上位5項目は、「子どもが求める時」(99名)、「泣いた時」(87名)、「子どもが愛おしと感じた時」(77名)、「ぐずった時」(64名)、「元気がない時」(45名)となった。

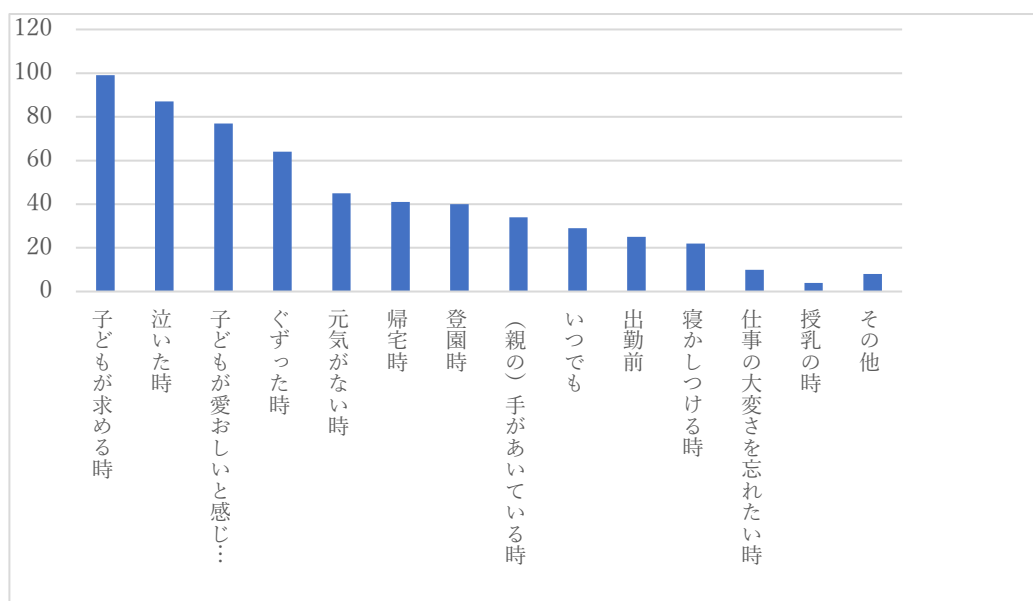


図2 どのような場面で「抱っこ」や「おんぶ」を行っているか

この結果から、保護者は、子どもからの発信があった場合にに応じていることが主となっていると考えられる。このことから子どもの年齢や保護者へ子どもの抱っこやおんぶの求め方、泣き方の強さなどが影響し保護者が子どもを受け容れていると考えられる。また、保護者の中には、子どもが愛おしいと感じた時や元気がない時など保護者自ら抱っこやおんぶを行う場合があり、保護者から積極的に子どもに関わろうとし、受け身的な姿勢で子どもと関わっているわけではないと考えられる。

(3) お子さんが満足または納得するまで「抱っこ」や「おんぶ」をしているか

お子さんが満足または納得するまで「抱っこ」や「おんぶ」をしているかという質問に対しては、0歳から3歳11か月の子どもの持つ保護者は、「抱っこする」75%（84名）、「抱っこしない」22.3%（25名）、未記入2.7%（3名）となった。

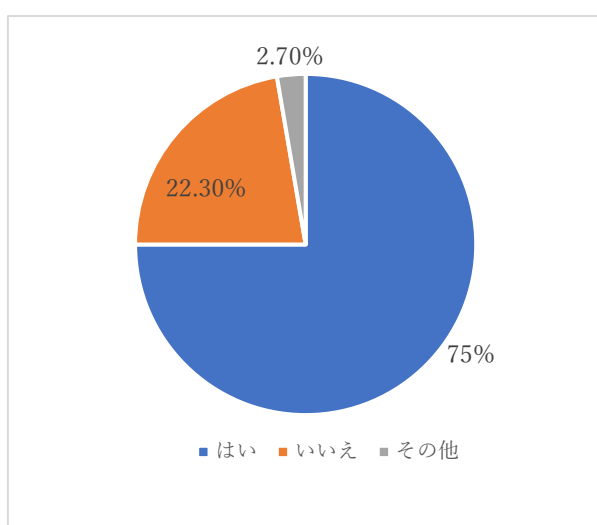


図3 お子さんが満足または納得するまで「抱っこ」や「おんぶ」をしているか
(0歳から3歳11か月)

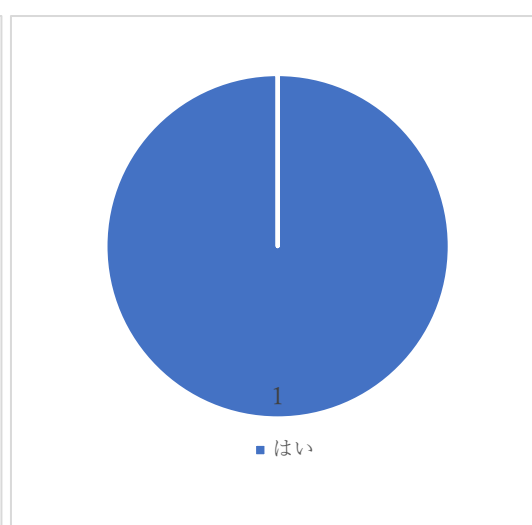


図4 お子さんが満足または納得するまで「抱っこ」や「おんぶ」をしているか
(0歳から0歳11か月)

年齢別で満足または納得するまで「抱っこ」や「おんぶ」をすると答えた保護者は、0歳から0歳11か月は、母数が少ないが、「抱っこ」をする1人（100%）であった。1歳か1歳11か月は、24名（85.7%）となった。2歳から2歳11か月は、33名（80.5%）となった。3歳から3歳11か月は、26名（63.4%）となった。

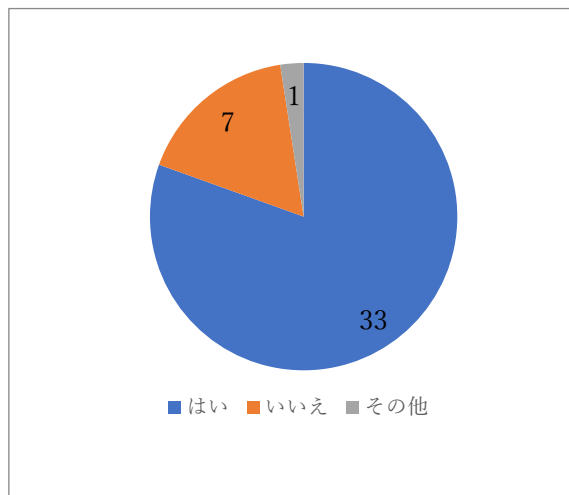


図5 お子さんが満足または納得するまで「抱っこ」や「おんぶ」をしているか（2歳から2歳11か月）

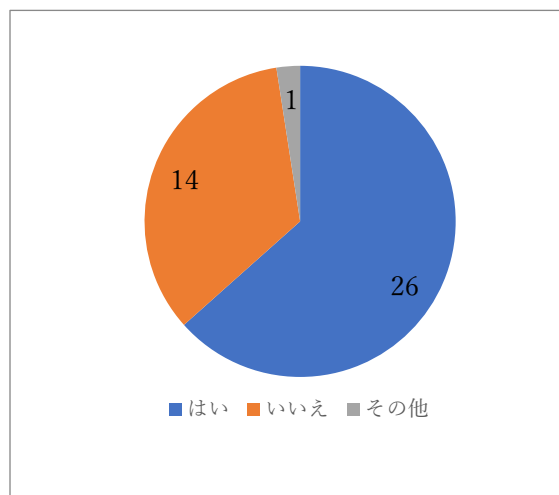


図6 お子さんが満足または納得するまで「抱っこ」や「おんぶ」をしているか（3歳から3歳11か月）

この結果から、いずれの年齢においても保護者は、子どもから要求される「抱っこ」や「おんぶ」に応じていると考えられ、子どもの年齢が低ければ低いほど保護者は子どもからの要求に応じていることが推察できる。

（4）「抱っこ」や「おんぶ」をする時の保護者の大変さについて

お子さんを「抱っこ」や「おんぶ」をする時に、大変だと感じるかお子さんを「抱っこ」や「おんぶ」をする時に、大変だと感じることについての質問には、「次に予定（炊事、洗濯、

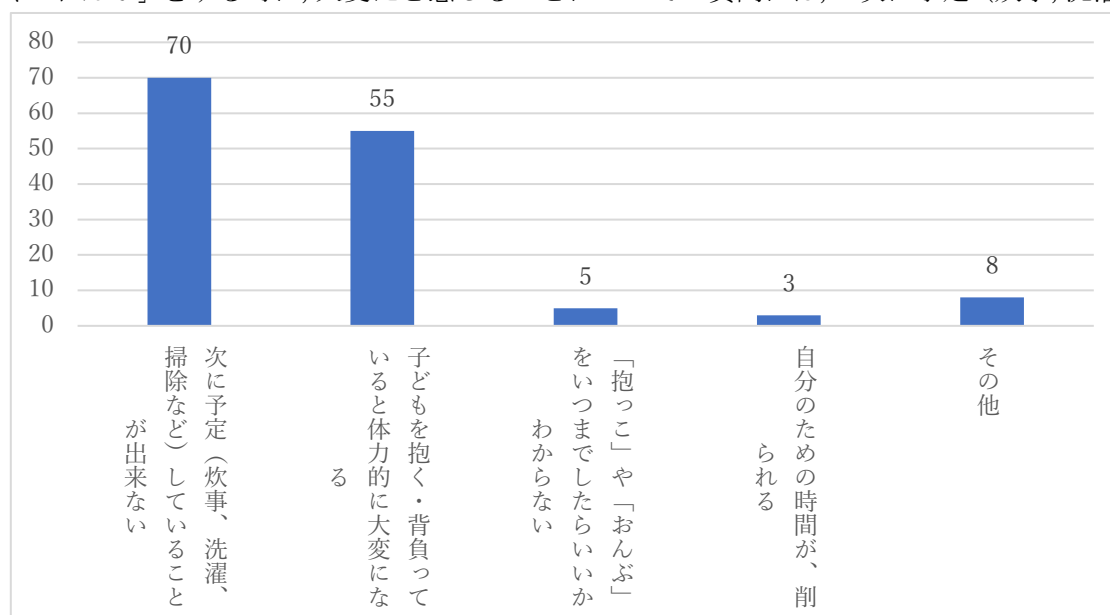


図7 「抱っこ」や「おんぶ」をする時の保護者の大変さについて

掃除など) していることが出来ない」「子どもを抱く・背負っていると体力的に大変になる」となった。

この結果から、保護者は子どもから「抱っこ」や「おんぶ」に応じようとするものの、子どもが満足または納得するまでに必要とする時間を保護者は予測することは難しく、保護者は、子どもからの要求に応じつつも、家事全般をこなすことを意識しながら関わりを持っていると考えられる。

次に、保護者は、子どもの要求に応じようとするが、身体の育ちに対応する大変さが考えられる。子どもは、年齢と共に身長や体重が増加していくが、子どもの心が満たされるまでは安心できる大人との関わりを積み重ねていくが必要になる。このことから、保護者は、子どもの要求に応じようとする気持ちはあるものの、保護者自身が長い時間子どもを抱き続けるなどの体力的な大変さを実感している場合が考えられる。

(5) 子どもが「抱っこ」や「おんぶ」を求めた時の気持ち

子どもが「抱っこ」や「おんぶ」を求めた時の気持ちについての質問には、回答数の高い順に「甘えたい時」63名、「眠たい時」27名、「寂しい時」25名、「怖い時」12名となった。

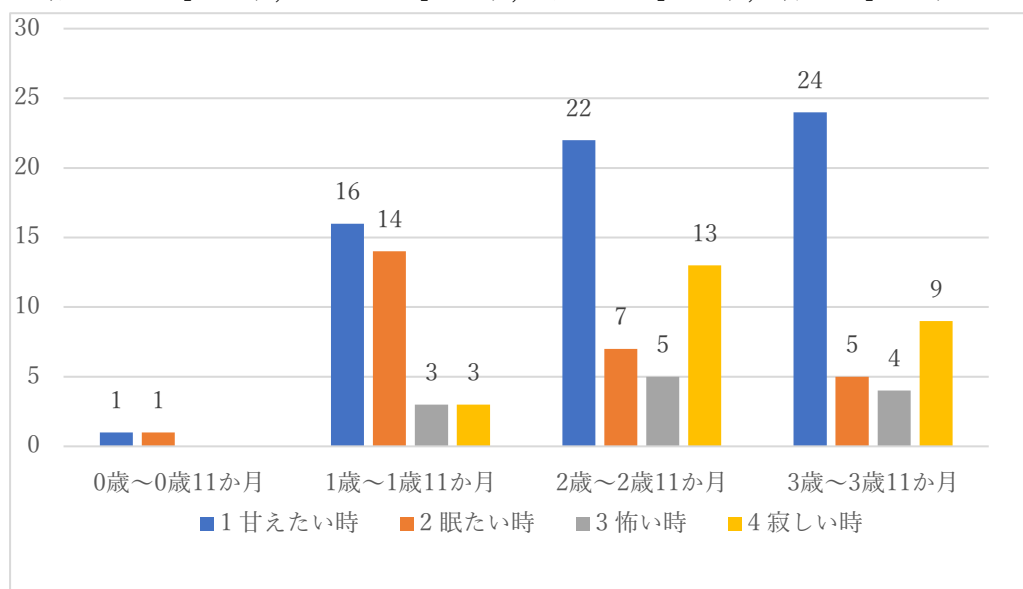


図8 子どもが「抱っこ」や「おんぶ」を求めた時の気持ち

この結果から、各年齢において保護者は、子どもが「抱っこ」や「おんぶ」を求めてくる時の気持ちを甘えたい時と捉えていると考えられる。2 番目以降の理由では、年齢別で見られ、1 歳から 1 歳 11 か月では眠たい時、2 歳から 2 歳 11 か月と 3 歳から 3 歳 11 か月では寂しい時となった。このことから、1 歳から 1 歳 11 か月の子どもを育てている保護者は、生理的欲求の 1 つである睡眠と捉えていると考えられる。次に、2 歳から 2 歳 11 か月と 3 歳から 3 歳 11 か月の子どもを育てている保護者については、子どもが自分の気持ちを単語や言葉で表現できる年齢であることや日常生活の中で保護者と子ども間で共有できる場面が増えることで、保護者は子どもの気持ちを汲み取り理解しやすくなっていると考えられる。

5. 結論

初めての保育の現場で「抱っこは子どもの自立を遅らせる」と言われた言葉に疑問を持ったことから、「抱っこ」は子どもの生育にどのように関わっているのか、どのような影響を与えるのか調べてみたいと思った。「アタッチメント理論」について書かれた文献を読み理解することで乳幼児期における愛着形成に不可欠である養育者と子どものスキンシップを再認識し、保育園などの集団生活においても「抱っこ」が必要であることを提言することを目的とした。

研究課題は「乳幼児期に必要とする専門職の関わりと今後の課題ーアタッチメント理論に基づくおんぶ・抱っこによる生育の有効性に関する考察」とし、方法は釧路市内にある私立保育園 4 園の 0 歳児クラスから 3 歳児クラスに通わせている保護者 159 名を対象とした質問票調査とした。

結果は、子どもは「甘えたい時」「眠たい時」「怖い時」「寂しい時」に「抱っこ」や「おんぶ」を求め、保護者は子どもの欲求に応じて出来るだけ積極的に関わろうとしていることが判った。

結論として、保護者は「抱っこ」「おんぶ」が子どもに与える役割を「安心感」「安心材料」「安心剤」「精神安定」など「子どもに安心感を与えるためのもの」という認識を持っていた。更に「抱っこ」「おんぶ」は子どもにとって安心感を与えるから必要なものである。と同時に保護者にとっても「抱っこ」「おんぶ」の時間は「子どもへの愛情を育み親子の絆を深める幸せな時間で保護者自身も安心する心休まる時」と感じていた。

「抱っこ」「おんぶ」についての自由記述では、以下の回答があげられる。

「腕が辛くても出来るだけそれ以上にいっぱいしてあげたい」

「忙しかったり疲れていると大変な時もありますが、出来るだけ応えていきたい」

「家事などが後にあると早く降ろしたいと思いますが、時間や手が空いてる時はなるべくしてあげたい。今のうちしか出来ないと思うと愛おしい」

「親は大変でも、沢山して貰えると子どもは愛されていると思える」

「余裕がないと疎かになってしまったり日常の忙しさで向き合えていないと感じてしまう事が多いが、抱きしめることで心が穏やかになってくれる」

「大変だけど自分も不安が無くなるし、お互い安心感を与えられる」

「愛着形成に大切な行為、子どもの安心感を作るために必要なこと」などが書かれていた。

保護者が「抱っこ・おんぶ」は親子双方にとっても必要であることを理解していて、子どもにとって「大切な愛着の形成」であり「親自身の体は大変でも沢山してあげたい」と願っている。そのことが明確になった。

保護者が「抱っこ」「おんぶ」が子どもにとって必要であり、「子どもの求めに応じて沢山してあげたい」と願うのであれば、保護者の願いである「抱っこ」「おんぶ」を保育所保育園においても取り入れる必要があるのではないだろうか。

子ども達は一日 10 時間 11 時間を保育所で過ごすのである。子ども達は家庭で過ごす時間よりも長い時間を保育所で過ごす。その子ども達が「抱っこ」「おんぶ」を求めるならば保育者は求めに応じるべきである。このことは保育者としては最も大切なミッションとし

て心に留め,子どもの気持ちを受け止めなければならない。保育所は保護者の願いに向き合うべきである。「抱っこ」「おんぶ」を保証することは,子どもの心に安心・安全のイメージを刻み,心の安全基地を作り,感情をコントロールすることのできる脳を育てることである。「抱っこ」「おんぶ」は愛着を形成してしっかりとした人間力の基礎を作ることに他ならない。山口¹⁴⁾(2013年)は〈ちょい抱きのすすめ〉を提案していて,「短くてもちょこちょこスキンシップをとることで安心感を持つことが出来る。」と薦めている。愛着障害が5歳前後で発症することを考えると保育所はその責任を担わなければならない。一日10時間11時間を保育所保育園で過ごす子ども達が安心して心の安全基地を持ってより楽しい保育所生活を送れるように,また保護者も保育所を信頼して預けて働くことができるようにするためにも,「抱っこ」「おんぶ」は保育所保育に必要と考える。

しかし現在,2019年から続くコロナのパンデミックで保育の現場は危機的状況になった。集団生活の中で,三密を避け保育士も感染防止のためマスク・ゴーグル着用で子どもと対応しなければならない。このような状況で子どもの健全な成長や子どもの権利や利益は守れるのだろうか。子どもとのスキンシップの取り方など今後の課題であり答えはまだ出ていない。更なる研究を続けていきたい。

6. 引用文献

- 1) 明和政子(2019年)『ヒトの発達の謎を解く』ちくま新書
- 2) 文部科学省 政策審議会(2009年)子どもの徳育の充実に向けた在り方について 3.子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題
- 3) 小野寺敦子(2009年)『手にとるように発達心理学がわかる本』かんき出版,p.88
- 4) 藤永保(監修)内田伸子・繁榊算男・杉山憲司(2013年)『最新心理学辞典』平凡社, pp.6-8.
- 5) 山内昭道(監修)太田光洋・平山祐一郎・渡辺弥生・熊澤幸子・松川秀夫(2005年)『子育て支援用語集』同文書院,pp.82-83.
- 6) 小野寺敦子(2009年)『手にとるように発達心理学がわかる本』かんき出版,pp.90-91.
- 7) 明和政子(2019年)『ヒトの発達の謎を解く』ちくま新書,pp.77-79.
- 8) 明和政子(2019年)『ヒトの発達の謎を解く』ちくま新書,pp.82-83.
- 9) ヘネシー・澄子(2004年)『子を愛せない母 母を拒否する子』学研教育出版,pp.30-35.
- 10) 米澤好史(2018年)『やさしくわかる!愛着障害』ほんの森出版,p.49.
- 11) 岡田尊司(2011年)『愛着障害 子ども時代を引きずる人々』光文社新書,pp.46-47
- 12) 山口創(2006年)『皮膚感覚の不思議』講談社,pp.205-206.
- 13) 山口創(2006年)『皮膚感覚の不思議』講談社,p.208.
- 14) 山口創(2013年)『幸せになる脳はだっこで育つ』廣済堂出版,pp.164-166.

7. 参考文献

- 今井和子(1998年)『0・1・2歳児の心の育ちと保育』小学館,pp.60-61.
福島哲夫(2018年)『公認心理士必携テキスト』学研メディカル秀潤社

山口創（2013 年）『幸せになる脳は抱っこで育つ』廣済堂出版 19

繁多進（2019 年）『基礎講義アタッチメント』岩崎学術出版社 210

高取しづか（2018 年）『ことば力のある子は必ず伸びる！』青春出版社

公益財団法人 母子健康協会 第 39 回シンポジウム「子どもの心を育てる保育」

全保協「全国の保育所実態調査」2008 年 5 月より 保育所の現状,課題と方策

明和政子「霊長類としてのヒトの子育てを考える」特集みんなで子育て 心理学からの提言

増井のぞみ（2021 年 1 月 24 日付 東京新聞朝刊）赤ちゃんを抱っこして歩くとなぜ泣きやむ？脳科学で解明,哺乳類の「輸送反応」

守山正樹・柏崎浩・鈴木継美（1980 年）「日本における初潮年齢の推移」民族衛生第 46 巻第 1 号

初塚眞喜子（2010 年）『アタッチメント（愛着）理論から考える保育所保育のあり方』,相愛大学人間発達学研究 2010,3,pp1-16.

松田枝織・是永かな子(2017)『アタッチメント形成・ペアレンティングトレーニング・応用行動分析の手法を用いた母子のかかわり』高知大学教育実践研究,pp.123-133.

汐見稔幸（2021）『プレジデントベイビー0 歳からの知育大百科 2021 完全保存版』プレジデント社

大豆生田啓友『2 歳児マスク推奨問題,背景にある課題を改めて考える』
<https://news.yahoo.co.jp/byline/omameudahiroto/20220217-00282444>

山口創（2021 年）『心と皮膚を守る“肌タッチ”』美感遊創 suntory 電子版

鈴木晶夫（2014 年）『非言語行動を手がかりとした人間関係研究－身体接触を中心に－』心身健康科学 10 巻 1 号,pp.1-5.

中村克樹（2004 年 2 月）『非言語コミュニケーションの意義』学術の動向 9 巻 2 号,pp.28-31.

友田明美（2019 年）『マルトリートメント（避けるべき子育て）が子どもの脳の発達に与える影響について』公益財団法人 母子健康協会機関紙「ふたば」 No83

謝辞

質問票調査に協力して下さった釧路市内の私立保育園 4 園の先生方と 0 歳児クラスから 3 歳児クラスの保護者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

小学校における「学校だより」による発信

ー児童理解と子育てのヒントー

秦 直 人

1. はじめに

現代社会の変容の中で、家庭の教育力や地域の機能が一昔前と比べると低下傾向にあると言われている。また、児童生徒の抱える問題が多様化し、深刻化する傾向も見られる。こうした中、学校が対応しなければならない状況は多く見られ、教員や児童生徒にもストレスの増大は大きな課題となっている。¹⁾

この極めて多岐にわたる生徒指導上の諸問題に対し、校長は直接子どもたちと関わる教職員と連携して、児童理解に基づく生徒指導のあり方について、しっかりとした方針を打ち出さなくてはならない。ここ数年のコロナ禍においては、様々な制約から子どものメンタル面にも変化が見られたり、保護者の様々な想いに対応を迫られたりすることが多くある。

子どもたちが日常生活において接する機会が多いのは圧倒的に保護者と教員である。そして、保護者や教員は自らの子どもたちに対する関わりの与える影響の大きさを十分に自覚する必要がある。

ここでは、「学校だより」の巻頭言を通して、家庭における子育てのヒントとなるよう校長として各家庭の保護者に対して発信してきたことを検討してみたい。

2. 「学校だより」巻頭言の内容

(1) 発信のきっかけとなった前任校での実践

2017年、前任校のPTA研修会で「子どもをどう見ていくか」と題して校長講話をさせていただいたときに、保護者から「校長の子育て論をもっと披露してほしい。学校だよりの巻頭言はどうでしょう。」と要望があった。それまで月1回発行される学校だよりでは学校の様子や学校経営に関する校長の考えなどを記載することが多かったが、子育てに関した記述に対しては保護者の反応も良く、コミュニケーションの深まりが見られたのである。

以下は学校から発行されるおたよりも子育てについて保護者と共有し合えるツールの一つであると確信したきっかけとなった発信である。

A 小学校学校だより「明日から夏休み」 H30.7.21 発行

(前略)

先日、テレビを見ていたら「ほめちぎる教習所」の話題に興味を奪われてしまいました。その教習所は「ほめる教習」を実践して3年半。地域で一番の人気を誇り、合格率が上がり、事故率も下がったらしいのです。以前だとちょっと注意すると泣き出したり、教習に来なくなったり…でも、ほめることによりモチベーションが低い人でも、自発的に考え、能動的に動くようになったというのです。

偶然、私が目にした教育雑誌の特集「いまこそ『正しくほめる』教育を」²⁾という内容と重なるも

のがあり、「どのようにほめれば、子どもを伸ばすことができるのか？」について考えてみました。前述の教育雑誌では、「ほめる」ということに対し、次のような記述がありました。

- ・むやみにほめてばかりでは、子どもは壁にぶつかることなく成長し、精神的にもろくなり、社会人になって、失敗したり怒られたりすると心が折れやすくなる。
- ・常にほめられるということは常に現状を肯定されているわけで、子どもが「これではだめだ」「もっと頑張らないと」といった自分自身を振り返る機会を失ってしまう。

確かに何でもかんでもほめることは、いかがなものかと思います。「ほめる」ということでこれまで私が先輩たちから指導されたのは「本人が頑張ったところを認め、ほめてあげる」「結果よりもプロセスを認め、ほめてあげる」という点です。「途中であきらめず、最後まで頑張ったね!」とプロセスをほめてもらうことができれば、たとえ、結果が伴わなくても、努力は報われ、次につながる意欲がわいてくるような気がするのです。

子どもの成長のためには、まず、『子どもをしっかりと見てあげる』という、とても大切なところに立ち返る必要があります。子どもの様子、心のあり方をしっかりと把握し、その上でどう声かけし、どう接していくのかが問われていくと思うのです。学校と家庭・地域が連携し、子ども達の成長を支え、導いていきたいものです。（後略）³⁾

（2）現任校での学校だより巻頭言の具体的な内容

「けがや事故無く有意義な夏休みを」 R3.7.21 発行

（前略）

「この一年間で頭と体と心をバランス良く、しっかりと鍛えていこう!」4月の始業式の時に私が子どもたちに示した今年度の目標です。私はこの1学期の4ヶ月足らずの間にも、本校の子どもたちがいろいろな面で成長したなあと感じています。

保護者の皆さんはいかがでしょう。家庭でのお子さんの様子や4月と7月に行われた2度の参観日での子どもの姿をご覧になって、お子さんの成長に気づかれているでしょうか。ややもすると「あれができない」「これがまだまだ…」と悪い面ばかりに目が行きがちですが、子どもの成長のためには、まず、『子どもをしっかりと見てあげる』という、とても大切なところに立ち返る必要があります。子ども達にとっての「目に見える成長」と「目には見えにくい内面的な成長」をきちんと見取ってあげ、認めてあげたり褒めてあげたりする。子どもの様子、心のあり方をしっかりと把握し、その上でどう声かけし、どう接していくのかが問われていくと思うのです。

学校と家庭・地域が連携し、子ども達の成長を支え、導いていきたいものです。（後略）⁴⁾

コロナ禍の中、感染対策を施しながら参観日を実施した際、久しぶりの授業参観での我が子の様子に憤慨している保護者と話す機会があった。「手を挙げない」「集中していない」などと気になることがいっぱい目についたのだろう。偶然、日頃の頑張りを見ていた子だったので、「日頃、こんな良いところを私は見ていますよ」とお知らせしたのですが、家に帰ってから母親は我が子にどんな声かけをしたのだろうか。このことをふまえて発信した巻頭言である。

この後、夏休み明けの学校だよりでは折にふれ、子育てのヒントとなるようなことを記述していった。これをきっかけに学校評価のアンケートで返信があったり、PTAの会議の際に保護者から声かけされることが増え始めた。以下がそれらの例である。

「子どもの成長」 R3.11.30 発行

最近、ニュースで小・中学校での痛ましい事件・事故が続けて報道されています。それらの中には子ども同士の人間関係のトラブルに端を発したものも多く見られます。

本校でも様々な個性や考えを持った子ども達が集団生活を行っていますので、人間関係のトラブルは起こります。これは子ども達の成長を考えたとき、貴重な経験とも考えられます。集団生活をおくる中で、子どもは失敗したり悩んだりすることを通して成長していきます。大人が先回りして、そのような経験を回避させ続けていくと、「自分自身で解決していく力」「頑張ろうとする力」「我慢する力」を培うチャンスを逃し、何事においても「他人や周りが悪い」という想いが強くなり、自分自身の言動を振り返りながら成長していくということが難しくなります。

子どもが失敗をしてしまったとき、「そんなことしたらダメ!」と頭ごなしに否定したり、「こうすべきだった!」と正論を押しつけるのではなく、まずはその子なりの言い分・想いをしっかりと聴いてあげたいものです。「自分はどうしたかったのか」「どうなると良いと思ったのか」そんな想いを受け止めながらも、「その手段はどうなんだろう?」「もっと良い手段はなかったらどうか?」と自分自身の行動を振り返らせ、自分の行動に責任を持って生きていかなければならないという『自己決定・自己責任の場』を繰り返し経験していくことが大事になってきます。

子どもは失敗や悩みを乗り越えながら成長していきます。その点をふまえ、私たちは安全・安心の学校づくりのために様々なアンテナを張り巡らし、子ども達がしっかり成長していける環境づくりを保護者、地域の方々と連携して取り組んでいきたいと思っています。（後略）⁵⁾

〔学校評価アンケート等⁶⁾に返答のあった保護者の声〕

- ・ ついつい「何やってるの!」と強い口調で怒ってしまいます。イライラした気持ちで怒っても、子どもには伝わっていないのはわかるのですが。努力します。
- ・ なるべく、我が子の言い分は聞いてあげようと思いますが、どこまでが本当なのか、時としてイラッとしてしまうときがあります。
- ・ 感染症の関係で親同士の交流も少なくなりました。愚痴ったり、相談し合ったりすることって大切なんだなと思っています。

「自ら考え、主体的に」 R4.4.28 発行

（前略）

ある日、子どもが「ゴミを拾ったよ。」と私に見せてきました。「拾ってくれたんだ。ありがとう。うれしいな。」こんなやり取りをした次の日は、別の子が「ゴミを拾ったよ。」と私に報告してきます。

雨で濡れた玄関先を走ってくる子がいたので、「滑って転ぶかもしれないね。慌てないでね。」と声かけしたら、それを見ていた別の子が「あの子、いつも慌ててるんだよね。」「（自分は）濡れたところは走らないよ。」と話しかけてきました。

子どもたちの多くは、自分を認めてほしいし、注目してほしいと思っています。なので、その欲求が強くてしまうと、周りに対してお節介だったり、しつこかったりして相手を不快にさせたり、時には注意されるようなことを目の前でわざとにするという子どもも少なからずいました。

私が子どもたちと関わるなかで、普段、心がけていることは子どもたちの思いや訴えをしっかりと聴いてあげることです。「私もそう思うよ。」と同意したり、「そうか、あなたはそう思ったんだね。」と受け止めたりしながら。願わくば、私にいろいろと聴いてもらっているうちに、その子なりの解決策や見通しが見つってくれるなら、それはその子の主体性が大きく伸びるチャンスだとの思いからです。子どもの失敗や愚痴に対しても、その子の成長のチャンスだと思い、「あなたはど
うしたいの?」「どうなったら良いと思う?」と問いかけてみます。時には、「何か手伝ってほしい
ことある?」と投げかけることもあります。子どもたちが自分で決め、自分で責任を持つという経験
を積み重ねていくことにより、他人に依存しない、他人のせいにはしない主体的な子どもに育っていく
からです。 （後略） 7)

〔学校評価アンケート等に返答のあった保護者の声〕

- ・子どもの言い分はしっかり聴いてあげようと思っていますが、どうしても大人の論で言い返してしまいます。子どもが自分の意志で動いていけるよう関わっていきたいです。
- ・他人の子だったらできそうですが、我が子が悪いことをしたり、愚痴ったりしていたら親としてはなかなか冷静にはなれないものです。校長の話、頭ではわかるのですが…
- ・子どもの注目行動に興味があり、色々と調べたりしました。親として子どもをしっかり
と見ていきたいと思います。

「今更ですが…あらためてアンテナを高くして」 R4.10.31 発行

（前略）

「この前、〇〇湯（銭湯）で校長先生を見つけたよ。普段マスクをしてるから、マスクを外した顔をじろじろと見てたんだよ。校長先生だよ、気づいた?」

先日の登校時、ある男の子がニコニコしながら私に話しかけてきました。私かどうかが自信がなかったようですが、おそらく私に違いありません。私は気づかなかったのですが…

今さらかも知れませんが、私が本校に赴任してから1年半、マスクは欠かせないものになっていますし、学校でも給食時以外はほとんどの時間、皆がマスク生活をしています。私はこれまでオンラインによる朝会の時、校長室からひとりで配信する場合はマスクを外して話した事はありませんが、確かに子どもたちからすれば、マスクをした私の顔が定番になっていることでしょう。逆に、子どもたちもマスクをした顔が私にとっては見慣れた顔になります。そういえば、修学旅行に同行したとき、何度かあった食事の際にマスクを外した6年生の顔がとても印象的だったことを思い出します。

よく言われることですが、相手から受け取る感情や気持ちは、相手の言葉（聴覚・言語情報）よりもその表情（視覚情報）によるところが大きいとのこと。「目は口ほどにものを言う」とは言いますが、口元も表情を読み取る上でとても大きな要素です。そう考えると、口元を隠しているマスクは確かにコミュニケーションを図っていくには大きな妨げになっているかもしれません。

あらためて、私たち大人は子どもたちに対するアンテナを高くし、子どもたちから発せられる様々な情報をしっかりとキャッチしながら子どもの気持ちを把握することが大切になります。マスクの下

の表情を読み解き、子どもたちを丁寧に見取っていく努力をこれからも続けていこうと意を強くさせられた子どもからの声かけでした。（後略）⁸⁾

〔学校評価アンケート等に返答のあった保護者の声〕

・家庭ではマスク無しの生活が多いので、学校の様子とは違うかも知れませんが、このコロナ禍の中、子どもの表情を見逃さず、しっかりと見ていくことは本当に大切だと思います。

・うちの子は学校のことを家ではあまり話さないで、担任の先生が学級だよりで日頃の様子を知らせてくれるので助かっています。親が子どもに学校のことをしつこく聞くのも嫌なので、せめてアンテナだけは高くしておきます。

3. まとめ

コロナ禍で保護者との交流が制限される中、学校で気付いた「気になる」場面や出来事を、意識的に「学校だより」を通して発信した。その結果、アンケート等で呼応してくださる保護者が増えてきた。

「目には見えにくい内面的な成長」の一部ではあるが、発信を重ねることで、保護者の意識も高まり、さらには学校では見えない、見えにくい子どもたちの姿、保護者のお子さんに対する働きかけの努力と苦労の様子が、少しずつ情報交換されるようになった。保護者の様々な悩みや不安に、学校としてどのように支援・対応していくかはとても大切なことである。しかし、これまでの経験上、適切な支援や保護者が満足のいく対応ができず、苦労したことも度々あった。

子どものつまずきについて、保護者は「家庭環境のせい」や「自身のしつけの悪さ」を言い、自分自身を責めている場合もあった。一方で、我が子のことは顧みず、担任や周りの友達の不満ばかりを訴えてくる保護者もいた。そんな時、私自身が気になったことは子育てに悩んでいるのに、相談相手がいないため、親自身も疲弊し、子どももストレスがたまりトラブルを繰り返すといった悪循環が見られるということであった。

保護者の様々な悩みや不安を適切に解決していくことは難しいことではあるが、保護者の話を共感的に聴くことに努めながら、信頼関係をつくり、保護者が心を開き、本音で話しやすい環境を作っていくことの大切さは実感できる。

親同士の交流が少なくなっている昨今、子育てに悩みや不安を抱えている保護者は多いと思われる。学校だよりで私自身の子育て論を押しつけるつもりはないが、その内容に対しての肯定・否定をふまえて、保護者自身の子育てを振り返ってもらったり、参考にしてもらったりしながら、必要があれば、自身の考えを返信してくる。こんなやり取りも昨今の教育相談のあり方の一つの手段であると考えている。

注

- 1) 株式会社 オノフ（2022）『令和3年度家庭教育の総合的推進に関する調査研究：『家庭教育』に関する国民の意識調査 調査結果報告書』（文科省委託事業）、令和4年2月

株式会社 リベルタス・コンサルティング（2018）『「公立小学校・中学校等教員勤務
実態調査研究」調査研究報告書』（文科省委託研究）、平成 30 年 3 月

2) 『総合教育技術』小学館、2016 年 7 月号

3) 学校だより 概ね月 1 回各家庭に配付される便り。巻頭言は校長が記すことが多い。

4), 5), 7), 8) 現任 K 小学校 学校だより巻頭言より原文のまま抜粋。

6) 学校評価アンケートは、現任校では子どもの様子や学校の運営について年 2 回、保護者
を対象に実施。自由記述欄に記載のあったコメントの他、直接、保護者から聞き取った
内容も編集して記載。

小学校における「地域の自然や環境から体験的に学ぶ学習」

—教職の原体験をもとにしたコロナ禍における体験活動の必要性—

秦 直 人

1. はじめに

これからを生きる児童は、知識基盤社会化やグローバル化が進む変化の激しい社会に生きていくこととなり、自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に判断したり、表現したり、他と協力するなど、より良く問題を解決できる資質・能力等を育成する必要がある。

このような資質や能力等を育成するためには体験的な学習や問題解決的な学習を充実する必要がある。

平成 29 年告示の小・中学校学習指導要領において、第 1 章総則第 3 の 1 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の中で、『(5)児童が生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること』と示されており、各校、それぞれの学校規模や地域性、歴史等を考慮し、「体験学習」の充実を図ってきている。

体験を通して学ぶということは、自分の身体を通して実際に経験する活動から様々な知識や技能、総じて「知」を獲得していくことである。そこでは子どもたちの五感、すなわち視覚・聴覚・味覚・臭覚・触覚などを働かせて対象に関わり、その対象から多くの「知」を体得していく。

私の小学校教員としての「体験的な学習」の基盤となっているのは自身が 20 代終わってから 30 代にかけて勤務した S 小学校での実践である。そこでの 7 年間にわたる実践研究は教員にとっての原体験ともいえるもので、その後の教員生活に大きな影響を与えている。

私が平成 2 年度に赴任した S 小学校は釧路町の東端に位置し、学校から数分歩いたところに厚岸湾・太平洋に面した漁港があり、ほとんどの保護者が漁業で生計を立てていた。私が在任中の全校児童数は、ほぼ 20 名弱で推移し、極小規模の完全複式指導の学校であった。

自然環境に恵まれ、すぐ裏には自然林豊富な山があり、その近辺には小川もあったことから季節毎の生き物や植物を観察することができた。そして、身近には青くて豊かな海。私にとっては生まれて初めての環境であり、とても魅力的な地域であった。しかし、その当時から、地域に不法投棄されるゴミ問題や主産業の場となる海の環境保全などが町内会や漁業協同組合を中心に問題提起され、対策が施されていた時期でもあった。子どもたちは豊かな環境の中にいる故にその良さに無関心だったり、問題意識をもって詳しく見つめることを忘れがちであった。そこで、子どもたちに今一度、地域を見つめ直さ

せ、身近な自然や社会現象に主体的に働きかけさせたいと考え実践を重ねた結果、子どもたちの成長に成果が見られた。

しかしながら、この3年ほどのコロナ禍の影響で児童の学習活動にも制限・制約がかけられ、地域に出向いて直接体験する学習や外部講師等を招いての本物に触れる活動などの実践は難しい状況が続いている。

コロナ禍においても「子どもたちの学びは止めない」をキャッチフレーズにオンライン学習の実施も軌道にのってはいるが、ここではあらためて、体験的な学習を通して得られる自然の大切さや生命の有限性、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などの実感と理解について、当時の原体験となる実践と現任校での実践について考察し、ウィズコロナ時代の体験活動のあり方を検討したい。

2. 「体験的な学び」原体験となる S 小学校での実践研究の概要

(1) 平成 3・4 年度及び 6・7 年度 釧路町教育委員会研究指定の実践

平成 3・4 年度の研究指定では研究主題を「豊かな心を持ち、生き生きと躍動する子どもの育成 ～地域の特色を生かした教育課程の創造～」とし、さらには 6・7 年度の研究指定では「地域に学び、郷土を愛す 心豊かな子どもの育成 ～地域の自然や環境から体験的に学ぶ学習を通して～」を主題として実践を深めてきた。

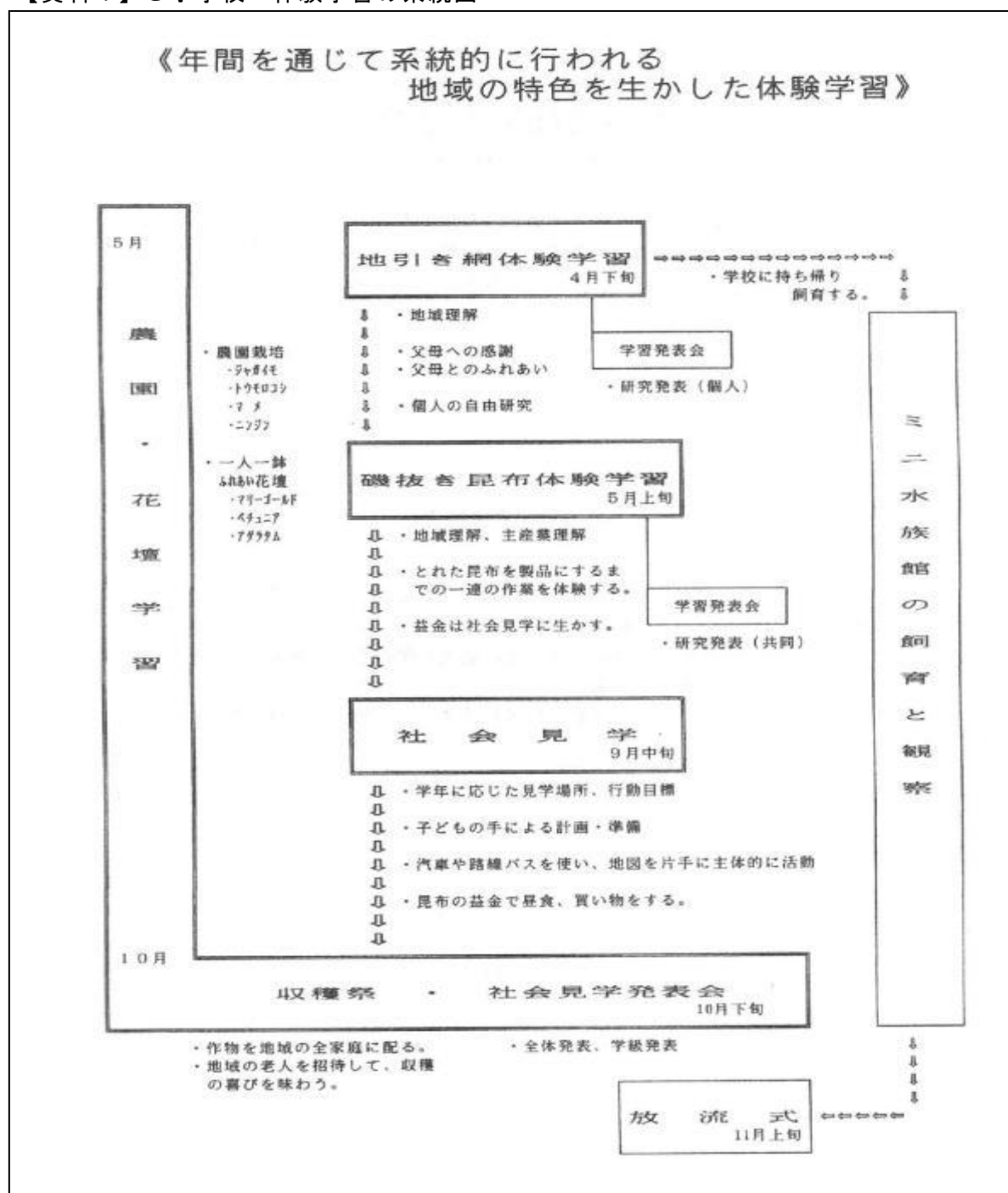
それまで実践してきた地域素材を生かした行事や活動を精選し、より豊かな個の伸長を図る教育活動を展開していく必要があると考え、学校創意の活動、体系的な体験学習を展開していける実践研究を推進した。

1) 研究仮説の具体化

- ①地域の特色を生かした体験学習や行事などを実践する中で、一人一人の児童の興味・関心が高められ、感動・驚き・喜びを持たすことができたとき、そこに能力や特性に応じた個々の学習が成立するであろう。さらに成就感や満足感を味わわせることにより次への意欲化が図られ、より積極的・主体的な態度が育成されるであろう。
- ②活動を通して解決したことや自分の考え、感想などをまとめ、表現する場において、一人一人の多様で個性的な活動を認めることにより、子どもたちは成就感や存在感を感じ取り、自信を深めていくだろう。また、表現する場を父母など地域の方々にも提供することにより、活動が持つ意義の理解とともに、活動に対する協力が得られ、教育効果も上がるだろう。
- ③地域に根ざした学習活動が地域の人々の協力のもと実践することにより、子どもたちは地域理解を深めるとともに、地域の人々に感謝し、地域の一員として寄与していこうとするだろう。

2) 具体的な実践

【資料 1】 S 小学校 体験学習の系統図 ¹⁾



① 【地引き網体験学習 4月】

特別活動、学校行事として地域の全面協力のもと全校で実施。児童2名が船に乗り、保護者とともに網をさした後、全校2班に分かれて、網を引いた。とれた魚を各自調べ学習し、後日、父母を招待して、全校児童による個人発表会を実施した。

当日捕れた魚の中から、学校の水槽で飼う魚を選別し、「ミニ水族館」として飼育と観察を継続させた。

《当時子どもたちの声》²⁾

「じびきあみはとてもおもしろかったです。それはいろいろな魚がとれたからです。でも、おもたくてひっぱれませんでした。みんなの力であみがあがってきました。かにのあかちゃんをもってみたら、くすぐったくて、はさみで手をかじられそうになりました。」 (1年女子)

「わたしは4月にてんこうしてきました。このまえのじびきあみたいけん学習では、魚の名前を知らないのでべんきょうになりました。つなをひっぱってなにがでてくるかたのしみにしていたらいろいろなものができました。かにやこまい、かれいやえびがありました。ここの海ではいろいろな魚があるんだと思いました。」 (2年女子)

②【磯抜き昆布体験学習 5月】

地域の共同作業である磯抜き昆布作業に参加。

〈1日目〉干場での昆布干し作業→砂引き→元の切断→昆布切り→体育館搬入

〈2日目〉選葉→束ねる→干入れ→梱包→製品引渡し

本活動で得た益金でさらに体験を拡げる活動として、社会見学へつなげることもねらいとしていた。

《当時子どもたちの声》³⁾

「わたしが思ったことは、こんぶをほしてとてもつかれたということです。とくにつかれたのは選葉です。あとはかんそうきからおろすのがたいへんでした。わたしが感心したのはみんな一生けんめいがんばっていたことでした。みんなえらいなあと思いました。」 (3年女子)

「私はこのいそぬき昆布が楽しみでした。いそぬき昆布の前に、学級ごとに話し合っているうちに6年生らしくやろうと考えました。(略)お父さんやお母さん方はこんなに大変な仕事をやっているのです。お父さんやお母さんの苦労がわかりました。これからもお父さんやお母さんの手伝いをして、少しでも助けてあげたいです。」 (6年女子)

③【社会見学 9月】

本校の地域性や環境などを考慮したとき、より深い社会性や生活経験を意図的に企画していかなければならない状況にあった。そこで、児童がより意欲的・主体的に活動できるように以下のような変更を図り、釧路市での見学・体験活動を実践した。

○変更前

○変更後

教師主導の見学場所の設定 → 学級毎の話し合いによる見学場所の決定

教師主導のしおり作成 → 見学場所の事前調査・地図作り・きまり作り

町のバスによる移動 → J Rや路線バスなどの交通機関を使い、自分で精算したり、切符を買ったりする体験

こづかい持参による買い物 → 昆布学習の益金の活用(交通費・昼食代・こづかい)

《当時の子どもたちの声》⁴⁾

「しゃかいけんがくで、えきまえからあるいて、きたおおどおりをとおって、ちずを見ながらさかえまちこうえんをさがしてやっとなつきました。こうえんにはふんすい、コンクリートのトンネル、ジャングルジムなどのあそびどうぐやトイレ、ベンチ、みずのみばやごみばこなどがありました。」 (1年男子)

「まず駅から出て、地図をみてパンのへいわけんへとむかいました。やっとなつてあいさつしました。中に入ったら、おばさんたちがパンをやっていました。わたしはああやっとなつてつくるんだと思いました。(略)わたしもパンやさんになりたいなあと思いました」 (3年女子)

④【農園・花壇学習 5月～10月】

海産物をとって生活する地域に育った児童は植物や作物を育てるという経験に個人差が大きく、素手で泥土をさわることを嫌がる姿も見られたりした。また、成長過程を観察したり、成長を願い、世話をするという姿も少なかった。

そこで、生活科・理科の植物に関わる学習と「農園・花壇学習」との関わりを明確にして教材を吟味し、作業暦・学習暦の作成を行い、年間指導計画への位置づけを図った。ビニールハウス・農園・花壇・一人一鉢花壇で児童一人一人が様々な植物や作物を栽培し、特に収穫祭では収穫した作物を父母とともに調理し、地域の人々を招いて収穫の喜びを味わうとともに感謝の気持ちを持ってごちそうする姿が見られた。

《当時の子どもたちの声》⁵⁾

「いもをほるときでっかいいもがでてきたのでびっくりしました。ひとつから17こもとれました。にんじんはながくてなかなかぬけませんでした。いもとにんじんをもってかえって、おかあさんにカレーライスをつくってもらいました。

とてもおいしかったです。」 (1年男子)

「今日、5、6時間目にビニールハウス作りをした。始めにビニールをかけた。

さわったらあつかった。5、6年生がハウスの中に入った。外から見るとハウスの中があつそうだった。そして、ハウスのビニールがとれないようにしっかりとひもでとめた。(略) ぼくはトマトやキュウリのたねをうえた。そして、花のたねをうえた。ダリアという花だ。そして、たいひとひりょうをやった。さいごに水をやった。

ぼくはダリアに早く大きくなれよと心の中でいった。」 (3年男子)

(2) 当時まとめた「研究の成果と課題」

それぞれの体験学習において、児童は直接体験することの楽しさや苦労した後の充実感などを感想発表や作文の中で大きく取り上げていた。

「地引き網体験学習」「磯抜き昆布体験学習」では地域の海を素材にした学習活動を通して、いつも目にしていた海に対する思いや地域の生業である昆布に対する思いに次のような深まりが見られた。

・前浜で行われる炊事遠足の際の浜清掃で、児童の意欲的・主体的活動が見られるよ

うになった。

- ・高学年はもとより低学年の子も休日や長期休業の際、昆布干しの手伝いをし、学校で話題にすることが多くなった。
- ・水槽の魚の世話や観察を通して、ただ食べるためのものだった魚の特徴や生態、特に餌に食らいつく魚の様子などをとらえたり、水かえの苦労や成長させるための難しさなどを口にするようになった。

「社会見学」は社会経験の拡充と視野の拡大という目的を十分に果たしたと思われる。特に事前の計画や準備から、児童の手によって進められ、当日の活動を心待ちにする姿が見られた。当日の活動は早朝から1日日程の見学・体験があり、行き帰り公共の乗り物を乗り継いだりする予定が組まれ、疲れていたはずではあるが、自分たちで計画し、準備した学習に意欲的に活動する姿が大いに見られた。与えられた内容ではなく、自分たちで主体的に計画し、一人一人が事前にしっかりと課題意識を持って活動に臨んだことが帰校後の学習のまとめにもしっかりと生かされていた。

「農園・花壇学習」において、児童は長期にわたる世話や作業の末、美味しい作物が実ったり、きれいな花が咲いたりということへの喜びが毎年、大きいようであった。

カラスが実やつぼみをもいだり、台風等による自然災害で作物や花に影響がでることが心配し、できる限りの対策を施す姿が年々見られるようになった。

また、始業前や放課後、休業中に主体的にお世話をするようになったことも大きな成長の一つであった。それぞれの体験学習の実践が積み重なっていく中で、前年度の活動を想起し、成果と課題を意識した計画立てができるようになったり、調べ学習の課題設定の見通しや事後の発表の仕方などを上級生が下級生に対して支援する姿が見られるようになってきた。そして問題解決の方法やまとめの表現方法を工夫するようになってきた。

3. 現任校での「体験的な学び」の実践

(1) 3年生「武佐の森」探検

学校から徒歩20分ほどにある「武佐の森」は鉄道防風林として長年維持されてきたもので、手付かずの自然が残っており、現在でも樹齢400年を越すミズナラの巨木やハルニレが茂る自然豊かな森となっている。

本校では3年生が総合的な学習の時間の学習として、「武佐の森」をフィールドとして調べ学習を行っている。春・夏・秋と季節が変わる時期に出向いていって、各自が課題を持って探求活動をしている。外部講師として「武佐の森の会」会長の大西英一氏⁶⁾を招聘し、くわしい説明をいただき、活動の充実が見られる。

《学習を終えた子どもたちの感想》

「季節によって、草や咲いている花の種類がぜんぜん違った。秋や冬はどうなっているのだろう。」

「近くにこんなしぜんゆたかなところがあるとは知らなかった。400年も生きているのを見たとき、とてもびっくりした。」

「ぼくたちの他にもさんぽやかんさつに来ている大人の人たちがいた。まい日、来ていると言っていた人もいた。こんどは家ぞくといっしょに行ってみたいと思った。」

(2) 5年生「エネルギー 釧路と石炭」

釧路の石炭が昔、硫黄分が少ない低公害炭として人気があり、石炭ストーブの燃料として使われていたということを、旧太平洋炭礦のお膝元である現任校の子どもたちが調べ学習していくことは、地域を知るという大きな価値があることである。

これまでも「釧路炭礦展示館」⁷⁾を見学・探求学習をしたり、校区のそばを運行していた「石炭列車」の当時の様子を炭鉱OBの方をゲストティーチャーとして招いたりして学習を深めてきた。

また、石炭が燃える石であることを直接確認する体験として、石炭ストーブを焚く活動を継続している。釧路コールマイン(株)からストーブと石炭の提供を受け、子どもたちが「焚きつけ」を工夫し、苦勞しながら着火させる経験をする。点火後は石炭の燃える様子を観察し、ストーブの火力を確かめるためにやかんでお湯を沸かし、お茶を飲むという経験もした。子どもたちは石炭が燃える音、煙の臭い、暖かさなど、まさに五感を使って石炭ストーブの良さを実感するのである。

《学習を終えた子どもたちの感想》

「これまで石炭がいろいろなことに使われてきたことを知りました。水素を作り出すこともできると知って、これからも石炭はもっと活躍できるのではないかと思います。未来のためにもこのまちの石炭を誇りにし、石炭を少しでも多く残せるように大事に使っていききたいと思う。」

「学習するまで私は石炭はいらないと思っていました。地球温暖化を防ぐためにレジ袋を有料化したり、木を植えたりしているのに、二酸化炭素を出す火力発電所をわざわざ作らなくても良いのではないかと考えていました。でも 今回の学習を通して、再生可能エネルギーだけでは、まだ安定した電力を得ることができないことを知り、改善される方法ができるまでは、石炭が日本を支える必要があると感じました。」

(3) 6年生 キャリア教育「地産地消とものづくり企業」

ここ数年、釧路市産業推進室が主催で地産地消釧路ネットワークとものづくり企業の釧路製作所が連携した出前授業を実施している。

地産地消の関係では釧路の産業と地場産品についてクイズを交えてわかりやすく紹介

をしてもらった。物づくり企業からは地元にかかる橋の制作についてや、現在、十勝大樹町の企業と連携し取り組んでいる小型ロケットの発射台作成についての紹介があった後、実際の体験として、レオナルドダビンチが考案したといわれる「レオナルドの橋」作りに挑戦した。子どもたちは長さ 25 センチメートル、幅 2 センチメートルの鉄の板棒を使い、溶接やボルトを使わず、橋を完成させる活動に積極的に取り組んでいた。⁸⁾

《学習を終えた子どもたちの感想》

「地産地消は自分が地域の物産を買ったり、地元のサービスを利用することが大切だとわかった。」

「橋の組み立ては難しかったけど、みんなで協力して完成させて良かった。」

「鶴見橋は 3 万本のボルトを使い、9 万カ所を繋いでいると聞いて、とてもびっくりしたし、作業も大変だっただろうと思った。」

「やる前はこんな金属の板だけで橋が作れるとは思わなかったけれど、実際にできて、なかなかの強度だったのでびっくりした。留め具などがなくても組み立てられたのはすごいと思った。」

(4) 「体験的な学び」の成果と課題

ここ 3 年ほどのコロナ禍のなか、学校における教育活動も当初の頃より感染対策を施しながら、子どもたちの学びは止めない努力をしてきている。特に今年度は新たな波として感染者の増加が見られ、学級閉鎖が相次ぐといった時期もあったものの、屋外でのマスク着用の有無や給食時のいわゆる「黙食」の緩和など社会状況を見極めながらの学校運営が求められている。

本校での体験的な学びの実践もその時々的情勢を見ながらの実施となってしまったが、屋外での活動、たとえば「武佐の森探検」であれば、計画通りの時期に予定していた調べ学習が実施でき、有意義な学習を進められた。

しかしながら、室内での学年全体（30 名×2 クラス）の集合学習となると、ソーシャルディスタンスの関係や換気の関係から制限、制約がなされてしまう面は見られた。5 年生の「釧路と石炭」の学習では、本来であればバスに乗って、「炭鉱展示館」や「釧路火力発電所」⁹⁾ などの見学が組まれていたが、移動の際のバスが密になってしまうため、見学を断念してしまったのであった。子どもたちは机上での学習に加え、実際に石炭ストーブを焚いてみるという直接体験を通して、釧路の歴史、石炭の良さを実感し、今後のエネルギー問題に対して大きな興味を持ったのは事実である。

「体験的な学び」において、一人一人に目的意識を持たせ、どう体験をさせていくかということがとても大切になる。学校規模や地域性に加え、コロナ禍という障壁もあるが、教員の工夫と努力で、有意義な「体験的な学び」を実践していることに感謝している。

4. まとめ

子どもたちに直接体験させるとき、学校規模や地域性など乗り越えなければならない壁は生まれてくるものである。事実、全校児童が十数名と数百名の学校では、一人一人の体験の度合いに違いがあるのは事実である。しかしながら、どのような状況であれ、「体験的に学ぶ」ことは大切であり、学校のみならず、家庭や地域と連携し、体系的・継続的に体験学習を実施できるよう工夫していかなければならない。

あらためて、これまでの体験を通した学びから、子どもたちはどのような力を獲得してきたのだろうか。古くから「聞いたことは忘れ、見たことは覚え、体験したことは理解する」と言われるように体験することにより、対象に関する知識や技能は獲得されていくと言える。身近であった海の近くの子どもたちも、実際の体験を通して、様々な知識や技能を新たに獲得していた。今は遠い存在となった石炭も直接体験することにより、その火力を知り、そして、エネルギー問題にまで知識を上げた。ある意味では憧れや尊敬といった、対象に対する個々の感性も磨かれていくのである。

また、個の知識・技能だけでなく、集団で協働して体験することから「仲間への配慮」や「協力することの大切さ」「自分は何をすべきか」「安全に活動するには」「集団活動のルールを守る」といった社会性や豊かな人間性も育まれるのである。

体験を通して学ぶ子どもたちの姿はとても明るく、活気に満ちている。こうした姿を実感することにより、我々、教員も手応えややりがいを感じてきた。子どもたちの成長や変容が教員のやる気を喚起させるのである。

また、教員にとっても体験を通した学びをカリキュラムに位置づけることで、知っているつもりになっていた地域の自然や文化、様々な人々の本質が見えるようになる。新たな人間関係や自らの知識や技能にも深みが増すのである。これらは我々自身のやる気や達成感、自己有能感を実感するととても有意義なことである。

これらのことから、子どもたちにとって自然や人、社会などについて学ぶために「体験を通した学習」はあらためて、とても大切なものであると強く実感するのである。

注

- 1) 平成 3・4 年度 S 小学校 研究紀要より抜粋
- 2), 3), 4), 5) 同上 研究紀要より 児童の作文を原文のまま抜粋
- 6) 「武佐の森の会会長」大西英一氏 くしろせんもん学校 環境・教育研究センター長
- 7) 「釧路炭礦展示館」旧太平洋炭礦の歴史・機械等の展示館 釧路市桜ヶ岡 3-1-16
- 8) 学習の様子が釧路新聞（令和 4 年 12 月 20 日）に掲載
- 9) 「釧路火力発電所」株式会社 釧路市興津 1-13-1

文献

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編 文部科学省

本校の体験学習



農園・花壇学習



地引き綱体験学習



磯抜き昆布体験学習



社会見学

「幼い子どもたちのためのコンサートひろば」の実践

—「0歳からのファミリーコンサート」の試み～豊かな感性の育ちを求めて その後—

進藤信子

1. はじめに～課題への取り組みについて

筆者は前号で、音楽が乳幼児期の発達の課題ともいわれていることから、乳幼児の音楽教育においては、成長を踏まえた慎重な配慮こそ大切であり、それが「豊かな感性を育てていく」ことについて述べた。そして、これに配慮して試みた2018年と2019年の12月、150

人規模のコンサートの状況についても報告した¹⁾。

コロナの流行と感染状況が収まらない中ではあったが、その後もこの取り組みは継続し、毎年様々な工夫をしながら、未就学の子どもたちのためのコンサートを開催してきた。ここ3年あまり、世界中に蔓延したコロナ感染状況によって、あらゆるイベントが中止と

なり、入学式・卒業式・学芸会・修学旅行もできないままに、子どもたちには思い出も残されず、感動体験の乏しい生活が強いられてきた。合唱して、響きあった声から得られる感動体験もなく、友人の応援に声を出して声援することもできない、もっぱら、電子機器を通して活動ばかりが活発になった。

「歌うな・踊るな」がもたらした風潮の考えや「黙食」・「心の中で歌う」・「応援の声は出さずに拍手のみ」という今までに経験のない生活体験の中で、これからこの時代を経た人がどのような影響があるかと考えると恐怖を感じてしまう。

さらに、一般的には、コンサートなどは、未就学の子どもの入場が制限されていて、なかなか、本物の音楽に触れる機会が少ない。

しかし、子どもの情操教育には、生活の中で触れる音を始め、脳の成長にも大きな影響があることは実証されていることから、現在の環境の中で、どのようにしたらその環境を整えていくことができるかを考え、試みることにした。



ところで、近年続いているコロナ禍で、乳幼児の生育環境が狭くなり、情報の多くはテレビやインターネット情報に頼らざるを得ない状況が続いている。

脳科学者川島隆太は、ストレスの多い社会環境との関係で、子どもたちの「緊急避難基地」の必要性を以下のように述べている。

子どもたちは幼稚園や保育園に通うようになると、それまでの家庭内のわがままが通用しなくなります。ものすごくストレスの多い社会環境にいきなり放り込まれるわけです。(中略) 家に帰ったときに家族にぎゅっと抱きしめてもらえたら、そこで安心し、つらい記憶やストレスもリセットすることができます。

これが、緊急避難基地の意味であり、役割なのです²⁾。

保育や子育ての中で大切なことは、子どもにとっての「緊急避難基地」であり、これは親子の愛着関係でのみ形成される。

また、日本赤ちゃん学会を創設し、乳児行動発達学の専門家である小西行郎は、岩田誠を引用して、「音楽能力というものが言葉の能力に十分匹敵できるほどの根源的なコミュニケーション能力の一つ」であると述べている³⁾。

また、小西行郎は、乳幼児における環境づくりの重要性を、以下のように述べている。

赤ちゃん学はその研究の中で、赤ちゃんは自ら行動し、自ら学習する存在であることを明らかにしてきた。まず赤ちゃんが動き、その動きによって引き起こされる変化を自らが認知し、学習し、脳を成長させる。つまり、学習しやすい環境をつくることこそが教育なのである⁴⁾。

それでは、このコロナ禍で、その環境はどうなっているのだろうか？

この件で、昨年、地元の小児科医の方と、これらの問題を話すことができた。医学的に感染経路は飛沫、エアロゾル、接触経路をそれぞれ注意すれば多くのイベントは開催可能であること。情操教育もあきらめることはないのでは？ということがコンサート実施の判断につながった。ただ、現在の国の政策では「考えて行動すること」、つまり、お年寄り、幼い子ども、また既往症のある人などが多様に生きるこの時代においては、コンサート・行事などの実施を判断するにあたり難しい問題があることも否めず、医療的に感染予防を考慮したやり方、一度決まったルールも丹念に根拠を求めた変更が必要であることをも認識した。

過日、コロナ3年目現在の状況にどのような感染予防をすることが大切か、とテレビのニュースの中で議論していたが、この時も丹念に根拠を見据えて大人が都度変更する柔軟な姿勢を持ち、その判断を子どもにも伝えていくことが必要だということだった。

しかし、筆者は、「声を出す」ことに制限を設けることについては、成長過程の中で、非常に大きな心配があると思っている。

語りかけ、語り合いでは声が懸け橋となる。また、乳幼児が自分の声を楽しんだり、周囲の人の声を模倣したり確認できる。このことは、マザリーズの概念から研究が進んでいる。けれども、その判断には、物ごころの理解できる年齢と、大人が安心して子どもたちを守る場合においては大きな違いと責任があると思う。

そもそも、子どもたちにとっての環境として大切な存在は親や保育者であり、成長発達については胎内から聴く母の声で情操教育が始まっている。情操を育てる・手指を使える・相手の考えていることを読み取る（共感性）、親子関係（子どもに対する支援）のなかからも足場をつくる・背中を押すなど、これらが言葉がけを伴って重要となっていくことは、多くの研究者が報告している。

その中で、足場になる保育者などの、「ありがとう」「がんばったね」を言える良い先生との出会いこそが「緊急避難基地」を広げることになる。子どもたちの心に寄り添え、共感し、さらに新しい一歩へつながる光を向けることができるような保育者も子どもの「緊急避難基地」である。

そもそも0～1歳では愛情に満ちた語り掛けが大切となり、「知りたい気持ち」が生きる気力となるが、1～3歳にもなれば五感のネットワークができて、呼吸のリズムも整う。2歳は「あとでね」と未来がわかり抽象的な概念も理解できるようになり、非認知能力や他者への理解ができてくる。

ヒトの脳の発達では、生まれてすぐ幼少期に感情との結びつきが強いとされる「海馬」が急速に発達し感動体験が人として「生きる意欲の源」となる。

幼児期の子どもたちに、音楽の体験をすることについては全国的に広まっており、子育て支援の対策の一つとして、母親、幼児に向けて「0歳児のためのコンサート」なども企画されることも最近増えている。⁵⁾

コロナ禍であっても、子どもたちの成長に安全な足場づくりをすることが重要となってくると思う。

2. 「幼い子どもたちのためのコンサートひろば」開催の実際について

私は地域社会の連携から家庭と保育者の連携を構築したいと思っている。

釧路市が街の活性化に向けた大きな取り組みである「輝くまちづくり交付金」は、市民と行政が協働、連携して公益的な事業を実施することで、地域やまちの課題を共有し、課題解決を通じて地域の活性化を図ることを目的としている。また、まちづくりの精神を次世代に引き継いでいくため、釧路市がより輝くよう、市が設定する課題テーマに沿って、市民から市と協働して取り組む形で提案事業を支援する制度を設けている。提案事業が採択されると、釧路市との連携が可能になる。

そこで、私は、釧路の「まち」との連携・協働を考え、2022年度の「若い世代を社会全体で支える基本構想」の分野に応募することにした。

これは、人口減少社会に立ち向かうため、若い世代が結婚し、子どもを健全に育てられる環境の整備に寄与する提案で、条件は以下のようなものである。

(1) 市が設定した課題テーマであること。

(2) 多くの市民参加が見込まれる公益的・公共的な内容で、過去の釧路市の類似補助金等による事業を含めて新たな取組であること。

- ただし、次のいずれかに該当する事業は対象外。

- そこで私は目的を考えてみた。

- ① 情操教育＝子どもたちの感動体験創出
- ② 連携（子どもたち・子育てに関わる人や団体との多様な交流）
- ③ 子育て家庭と子どもたちの感動の情報発信

幼い子どもたちやその保護者が、一つの企画の中で、良い音楽に触れる機会として、また、多世代・障害者などとの交流から、多くの体験を得て子育てに希望や勇気を得ること。さらには、手づくりで様々な子どもたちへの作



品を提供する母親たちのグループとのつながりを持つことで子育てに夢を描くことが出来るように心掛けた。その結果、プレゼンテーション審査を経て、採択された。

当日の内容について

右下写真:釧路新聞社提供



表1 12月17日「0歳からのファミリーコンサート」のプログラム、内容

プログラム	内容
1 オープニング	クリスマスメドレー
2 メンバー紹介とソロ演奏	『主よ人の望みの喜びよ』 ピアノ オーボエ チェロ 『アベマリア』 歌
3 絵本ミュージックシアター	絵本『おもちゃびじゅつかんのクリスマス』 ピアノ オーボエ チェロ 歌と読み聞かせ
4 釧路市少年少女合唱団・ 釧路短期大学音楽ゼミによる演奏	もみの木 きよしこの夜 ジングルベル おめでとうク リスマス アメージンググレイス
5 フィナーレ	合唱『あわてんぼうのサンタクロース』 出演者・来場者手拍子参加

2022年の企画はこれまでのホールから、様々な人の交流を目指して、「釧路市生涯学習センター」大ホールを会場にした（2018年・2019年北海道立釧路芸術館アートホール（200人収容）、2020年・2021年はフィッシャーマンズワーフ MOO の植物園（100人収容））。釧路市からの交付金も採択されて、規模を拡大することもできた。

また、当日は交流を目的にした、ハンドメイドショップも開催した。経験豊富なハンドメイドショップ・障害者就労支援事業者の販売する焼き菓子・ジャムなど、販売する障害者との交流、普段は参加が難しい障害者たちも、コンサートにも聴衆として参加した。

プログラムは、ピアノ・オーボエ・チェロ・歌によるクリスマスソングメドレーで始まり、次には、演奏者による、楽器の説明を加えて「主よ人の望みの喜びよ」をピアノ・オーボエ・チェロにより演奏した。また歌は「アベマリア」とした。

続いて、2018年にも同じ絵本を取り上げ好評だった「おもちゃびじゅつかんのクリスマ

ス」を、絵本の朗読とピアノ・オーボエ・チェロの曲の生演奏を入れて、絵本を大きなスクリーンいっぱいに映し出した。前回は、スクリーンの大きさに「もっと大きく映してほしい」という要望があったこともあり、音響など担当の方と綿密に打ち合わせた。

また、浦安の「ピュアホワイトクリスマスコンサート」でオリジナル曲として演奏されたものを、今回も使わせていただくことができた。

前回2021年に初めて、地元で活動している釧路青少年少女合唱団に参加していただいたが、今回は、釧路短期大学音楽ゼミの学生たちのトーンチャイムの演奏とコラボして『もみの木』『きよしこの夜』『ジングルベル』『おめでとうクリスマス』『アメージンググレイス』を演奏した。

最後は、会場に来ている子どもたちに手拍子を入れてもらって、出演者全員と「あわてんぼうのサンタクロース」を演奏した。

コロナ禍の様々な心配があり、大合唱とはいかなかったが、会場には、音楽があふれて、あちらこちらで、幼い子どもたちが、身振り手振りで踊っている姿も見られた。

会場に来ていた人の声をアンケートおよび聞き取り調査も含めてまとめた。



表 2 コンサートを楽しめましたか

	回答数(%)
楽しかった	88(95.7)
少し楽しかった	4(4.3)
楽しくなかった	0(0)

表 3 前回からの改善事項

- ・子どもたちも、一緒に歌うことはできない中でも、家族で手拍子など楽しんでいたようだった。
- ・ミュージックシアターは楽しい取り組みだったが、スクリーンに投影する映像が生涯学習センターホールで改善できた

- ・報道機関がたくさん取材などを申し出てくれた
 - ・障害者就労施設・ハンドメイドショップ が規模的には制限のある中でも、設営できた
 - ・前回までは、ホールの照明も制限があったが、今回は、音響照明に工夫できた。
-

感想

- ・0歳からでも Ok というコンセプトは小さい子どものいる家庭に素敵なこと(複数の記述)
 - ・ピアノ・チェロ・オーボエの音色が素晴らしかった。声楽のアベマリアもよかった。
 - ・子どもと行けてよかった。子どもがぐずっても退場してよいということはあるがたい
 - ・今後、何らかの形で、地域に子どもが本物に触れることのできる催しとして定着できるとよい。
 - ・とても楽しかった。最後のあわてんぼうのサンタクロースも楽しそうだった
 - ・ぜひ機会を増やしてほしい
 - ・2歳の子どもも引き込まれ、踊りながら楽しみました。
 - ・合唱・生演奏は母も癒された
 - ・耳にやさしい音楽でよかった
 - ・コロナ禍の中で何でも中止の中とても癒された。老若男女が参加できてよかった。
 - ・お父さんが小さいお子さんを抱っこしている姿がたくさんあって、ほほえましい。
 - ・障害者にとっては、声も出すことがあるが、会場の空気に楽しい時間になった
-



表 4 今後聞いてみたい曲・楽器

楽器：トランペット・バイオリン・フルート・いろいろな音色の楽器・木琴・オーボエ(音色が良かった複数)・金管楽器・いろいろな楽器

曲目：トランペット吹きの休日・クシコスポスト・クラシックの曲・クラシックを生で聞かせたい

- ・定期的に開いてほしい
 - ・人形劇・みんなで歌える曲
 - ・小学校教材
-

3. まとめと今後

家族で楽しい充実した時間の共有と本格的なコンサートに触れて、子どもたちの情操教育に役立つこと。また子どもの良質な成育環境を保障し、子ども・子育て家庭を社会全体で支援することを目標として開催したが、予想以上に広がりのある市民の参加を得ることができた。

障害者就労支援施設利用者・認知症を患うお年寄りを誘って参加してくださった方からの、時間を楽しんでくださったという感想が多くあった。

初めて大きなホールで開催し、果たして当日たくさんの市民が来場してくれるか、心配もあったが、この取り組みに賛同する報道機関が、事前告知などいろいろ尽力してくれたこともあり、0歳からお年寄りまで500人以上の多くの参加を得ることができた。

- ① コロナ禍の中、親子で音楽を楽しむことで、子どもの情操教育ばかりか大人の癒しとなった様子を感じることができ、終了後の新聞報道からも状況を感じることができた。
- ② コンサートひろばを形作っている協力団体及び協力するスタッフとの交流から、音楽だけにとどまらない互いの支え合いの場ができた。その後の活動につながることを視野に入れたが、協力学生が積極的で、子どもたちの世話や、協力団体への支えあいも予想以上にすることができた。
- ③ コンサートを通して、子ども・子育て家庭・子育てを支援する人・地域で暮らす様々な人が、気軽に和やかに交わる機会ができた。

子どもたちが地域の中で遊びの場が減少している中、特にコロナ禍という時代風潮がその流れに勢いを増しているが、環境・人的資源を真剣に考え、人とのつながりの中から今の時代に合った、子どもたちの情操教育を見直して行くことが大切であろう。

注

1) 進藤信子・田中英里（2020）「未就学の子どもたちのためのファミリーコンサートの実践：豊かな感性の育ちを求めて」『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』第3号。

2) 川島隆太（2015）『ホットケーキで「脳力」が上がる』小学館，p.112。

3) 岩田誠（2001）『脳と音楽』メディカルレビュー社（小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子編，日本赤ちゃん学会監修（2016）『乳幼児の音楽表現—赤ちゃんから始まる音環境の創造』中央法規，2021年8月第2版、p.3からの再引用）。

4) 前掲 小西・志村ら（2016）、p.2（担当執筆：小西）

5) 12年前から継続している、千葉県浦安市の「公益財団法人うらやす財団」による0歳から入場可能な「ピュアホワイトクリスマスコンサート」は毎年大変人気で、全国的にこのような取り組みも増えてきている。北海道では、札幌キタラ コンサートホールでも、最近では「0歳からのコンサート」を企画して親子でコンサートを楽しむイベントが開催されている。

2022年度 幼児教育学科の活動より

(1) 実習指導系科目を通した2学年共同授業の試み

施設実習の時期の変更（繰上げ）と学年をまたいだ実習指導の模索を以下のように行った。

- ・保育実習Ⅲ（本学では、施設実習（必修）2単位）を、1年生前期末（8月後半～9月）に前倒し。
- ・実習内容研究Ⅰ（幼1）における保育現場の体験で、施設を複数加えて実施。

実習指導および関係科目で、2年生と1年生の共同授業を試みた（以下の丸数字の順で十数回）。

- ①2年教育実習（幼稚園）前の模擬演習に1年生が参加、
- ②③幼稚園長講演会に1年生も参加（教育実習（幼稚園）の事前および事後）、
- ④教育実習（幼稚園）報告会に1年生も参加、
- ⑤1年生の施設実習に向けた指導案に2年生がコメント、
- ※⑥施設実習に向けた施設長講演会、
- ⑦2年生の指導案模擬演習に1年生が参加、
- ⑧保育所実習に向けた保育園園長講演会へともに参加。 以上前期。
施設実習（保育実習Ⅲ）約2週間・・・1・2年とも
保育所実習（保育実習Ⅰ後半・保育実習Ⅱ）約3週間・・・2年生
- ⑨施設実習報告会と1・2年生交流、
- ⑩保育所実習報告会と交流、
- ⑪1年生の保育所短期実習に向けた模擬演習に2年生が参加、
- ⑫KJC ランドに向けたチーム保育の活動＝11月初め～12月上旬の6～7週。
- ⑬KJC ランドでの実践。

※ 以上の試みについては、この改革を中心的に進めた白川和希講師が、全国保育士養成協議会全国保育士養成セミナー（北海道ブロック協議会担当）の第10分科会（リモート）で、「保育士養成のための大学カリキュラムを考える—小規模短期大学の取り組み—」として、その経緯と途中経過を報告した（8/26）。学年を越えた新たな動きが起き、1年生も翌年のイメージが想像しやすく、概ね好評。

※共同授業は、年間通して水曜日に設定し、前期は3時間目（午後最初の時間枠）、後期は2および3時間目に本学科の1・2年生が重なるように定めた。前期は、1年生の3科目（実習内容研究Ⅰ、教育保育実習指導、保育内容指導法）を並行して1～3時間目に充て、2年生の2科目（実習内容研究Ⅱ、保育・教職実践演習（幼稚園））を並行して3・4時間目に充てて、基本的にはそれぞれの学年で表記した冒頭の授業からそれぞれ15回を終わらせた後に、次の科目へ移るよう組み立てた。時折生じる空き時間は事前に教務・学生課に示し、他教科の補講枠として用いた。

※ KJC ランド：コロナ禍以前は案内を作成し、市内保育機関などを通して近郊の親子を本学に招いてのイベントを行っていたが、感染の可能性を抑えるため、この年は1・2年生合同6グループ＜1グループ10数人＞が、近隣園へ訪問しクラス単位での出前で保育実践をするか、本学へ招いての小イベントをするか、グループごとに選択・決定し、各グループ同時並行で実施した（実施日12/7）。過去の事例は、本学幼児教育学科実践報告第1～4号の各報告を参照されたい。

※⑥：該当年度は、施設実習の移行期であったため、幼1・幼2とも8月後半～9月末に施設実習を実施した。この実習の重なりは今回限り。

(2) 2022 年度の主な出来事～幼児教育学科関係

コロナ感染の心配は尽きなかったが、5 月連休明けから始めた 1 年生の保育観察には、施設への訪問を加えて進めた。前年入学した学年から、保育観察記録を PC で作成する学生が急に増えた。高校時代からコロナ対策で身につけたものと感じられた。

5 月末より 2 年生は教育実習 4 週間（幼稚園実習）。この間、初めて試みた 1・2 年合同演習（実習指導）の様子で、1 年生は翌年の自分の姿を想像できたのではないだろうか。

この年は、本学としても 7 年に一度の認証評価の年。6 月には報告書を基準協会に送付。報告書の作成は学長のご尽力あつてのものだった。

コロナ禍で延期となっていた、北海道保健福祉部の指導調査が 7 月 28・29 日に行われた。各保育実習の末尾につけているローマ数字が厚生労働省の示しているものと異なるため、わかりにくかったようで、あわせて実習施設を括弧で明示する変更を検討した。その後、科目名称変更（学則別表変更）をすることにしたが、申請時期との関係で、2024/令和 6 年度からの変更とする予定。

進藤先生の音楽ゼミを中心に、釧路市芸術館アートホールで、トーンチャイムと絵本の読み聞かせ、ピアノ演奏を行った（8/11）。

上記のように、8 月後半～9 月末は、2 年生が従来の方で保育所実習と施設実習を実施したことに加えて、1 年生の施設実習も重ねて実施した。

9 月には、釧路市私立保育園連合会の 13 園の代表の方々と懇談（9/20、本学にて）、釧路市保育所長会議の代表の方々と懇談（9/28、本学にて）を続けて持ち、また、10 月には釧路市私立幼稚園連合会の方々と懇談（10/28、釧路市生涯教育センターまなぼつとにて、くしろせんもん学校代表も同席）して、保育者養成に向けての貴重なご意見を伺うことができた。

前後するが、10 月後半、本学の認証評価のための訪問調査に代わる面接調査を受けた（10/19・20、リモート）。

11 月上旬、くしろせんもん学校と交互に共催しているリカレント講座「アニメーションで絵本の世界に親しむ」（講師：日本アニメーション協会理事長・黒木秀子先生、くしろせんもん学校主管）をリモートで行った（11/4 夜）。

学科だけのものではないが、コロナ感染でしばらくできていなかった緑輝祭（＝学園祭；第 41 回）は時間を短縮しながらも、一般公開として実施することができた（11/19）。学科学生は、緑輝祭と KJC ランドの準備が重なり、大変だった様子。

コロナ対策が緩まず、2022 年度も実習以外で外へ出ることを避けてきたため、前記のように、KJC ランドは変則出前形式となった（12/7 午前）。この年度も、認定こども園釧路短期大学附属幼稚園のほか、近隣園にご協力いただいたこと、大変ありがたいことであった。

「0 歳からのファミリーコンサート」では、進藤先生の音楽ゼミナールのほか、アートゼミ、特別支援教育ゼミの学生たちが、出演、裏方で活躍した（12/17）。

3 月下旬、認証評価で適格の知らせを頂戴した。

（井上 薫）

執筆者・研究協力者

橘 澄子 (釧路短期大学研究生)
小林 麻如 (釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)
秦 直人 (釧路市立湖畔小学校 校長)
進藤 信子 (釧路短期大学 幼児教育学科 教授)
吉川 修 (釧路短期大学 幼児教育学科 教授)
服部 健治 (釧路短期大学 幼児教育学科 准教授)
篠木 真紀 (釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)
白川 和希 (釧路短期大学 幼児教育学科 専任講師)
井上 薫 (釧路短期大学 幼児教育学科長・教授)

釧路短期大学 幼児教育学科 実践報告

第 5 号

2023 (令和 5) 年 3 月 29 日 発行

発行所 学校法人緑ヶ岡学園 釧路短期大学 幼児教育学科

〒085-0814 北海道釧路市緑ヶ岡 1 丁目 10 番地 42 号

TEL. 0154-41-0131 (代表)
